藤原氏関連遺跡観音寺廃寺跡　−掘立柱建物跡の復元−

島田祐悦（横手市教育委員会）

１．観音寺廃寺跡とは【図 1】

『日本三代実録』貞観 7 年（865）5 月 8 日条に「出羽国観音寺を以て、之定額に預かる」とある。「定額寺」は律令制下での大寺・国分寺と並ぶ寺院制度とされ、これには諸説あるが国家によって記された地域の大規模な寺院であった事は間違いないと思われる。『延喜式神名帳』延長 5 年（927）には、観音寺集落から北西の保呂羽山に鎮座する波宇志別神社が記載され、社伝では奈良時代創建とされる。南に位置する末野集落の杉平遺跡では須恵器窯の窯壁が出土しており、平安時代前期までには、この地域に有力な勢力がいたことは想定できる。

現在の集落は、観音寺・寺内・中房（厨房？）などと寺院を想定される地名が残り、丘陵西側裾野の街道際に立地する。中房集落西側には神宮館とも呼ばれる新城館跡があり、その裾野では平安時代末期から鎌倉時代初期の鏡 4 点がまとまって出土している（島田 2021）。東 2 ㎞の劔花山遺跡は、雄物川に面した単独丘陵頂上から平安時代末期の須恵器系陶器の四耳壺・片口鉢と水晶玉が出土しており、経塚であった可能性も高い。経塚といえば観音寺集落の西 200mに観音寺経塚が 4 基あったことが知られ、そこは古寺山といわれ、菅江真澄が観音寺集落から『日本三代実録』に記載された観音寺ではないかとしている（大森町 1980）。観音寺経塚は経塚が発見された範囲を遺跡としていると思われるが、山全体が遺跡で、その山頂の平坦面には経塚とともに寺院があった可能性も高いと思われる。

観音寺廃寺跡は上溝川が造り出した谷底平野に立地し、この古寺山の真正面にある。

２．観音寺廃寺跡発掘調査成果【図 1.2.3】

横手市大森町上溝字観音寺に所在する遺跡である。『秋田県遺跡地図』1976 年発行では記載がないが（秋田県教委 1976）、『秋田県遺跡地図（県南版）』1987 年発行では、宗教遺跡として「観音寺廃寺跡」が登録されている（秋田県教委 1987）。県営ほ場整備事業（中房地区）に伴い、平成 11 年 5 月 10 日から 11 月 12 日まで、23,500 ㎡の面積を秋田県教育委員会によって発掘調査が実施され、その成果は、五十嵐一治氏によって報告されている（秋田県教委 2001、五十嵐 2001 a . b）。

五十嵐氏によれば、南北に偏在する掘立柱建物跡を主体として南北に偏在する遺構群があり、南側を中心とする 12〜13 世紀頃に機能したもので、掘立柱建物跡群は、周囲に旧河道起源の水辺（凹地・低湿地）が点在する一帯を意図的に選択し構築されているという。水辺からは矢形・刀形の形代や斎串などが含まれることから水辺を介在させた祭祀遺構と評価している。北側の建物群は 15〜17 世紀に属する寺院跡で、14 世紀は廃絶か別の地点に移動したとする。輸入陶磁器の数量規模から中世初期にはこの地方を掌握するような有力者の庇護の下に南側遺構群が存立したことから明らかであり、15 世紀以降も同様であったと考えられている。発掘調査では「定額寺出羽国観音寺」であるという直接的証拠は提示し得なかったが、地方寺院として破格の「格式」を有していたことは明らかであり、「出羽国観音寺」であったことは確実であると結んでいる。

遺跡での大量輸入陶磁器から、平泉と関連する遺跡と評価したのは八重樫忠郎氏である（八重樫2002）。平泉藤原氏の宴会儀礼に使用されたのは、平泉型のかわらけ・常滑・渥美・白磁であり、その中でも手づくねかわらけ・白磁四耳壺・渥美刻画文壺・常滑三筋文壺を平泉セットととし、秋田県では矢立廃寺跡と観音寺廃寺跡がこれを有しているとしたが、前者が平泉的であるのに対し、後者は白磁碗皿が多く、四耳壺がほとんどないことや在地系かわらけから若干様相が異なるという。

３．観音寺廃寺跡の建物復元経緯【図 4】

弊職は、大鳥井山遺跡の遺物整理を通して、観音寺廃寺跡を含む横手盆地のかわらけの年代について 12 世紀中葉から 13 世紀前半と 4 時期に細分した（島田 2014）。この結果を踏まえて、図 2～4 に示したⅠ期からⅣ期までの年代は、Ⅰ期がロクロかわらけと白磁を含む遺構を 12 世紀中葉、Ⅱ期がロクロかわらけと新たに確認される手づくねかわらけ、そして須恵器系陶器等を含む遺構を 12 世紀後葉、Ⅲ期がかわらけの法量が縮小し、白磁に代わり青磁を含む遺構を 12 世紀末葉～13 世紀初頭、Ⅳ期がロクロかわらけを含まず、厚手の手づくねかわらけを含む遺構を 13 世紀前葉としている。

近年横手市では、古代後期から中世前期の遺跡での掘立柱建物跡の検出事例が増加している。この時期の遺跡は非常に少なく、その特徴を見出すのが難しい状況であったが、大鳥井山遺跡や金沢柵推定地での四面庇掘立柱建物跡の検出（横手市教委 2016. 2017）や、館尻遺跡・手取清水遺跡などの 12 世紀から 13 世紀前半の掘立柱建物跡など復元案等（横手市教委 2020）が示され、事例が蓄積されつつある。今後、大鳥井山遺跡の中心建物や金沢柵推定地の中心建物を復元するにあたり、同時代の遺跡である観音寺廃寺跡の掘立柱建物跡も比較対象とするため、再検討を行ったものである。

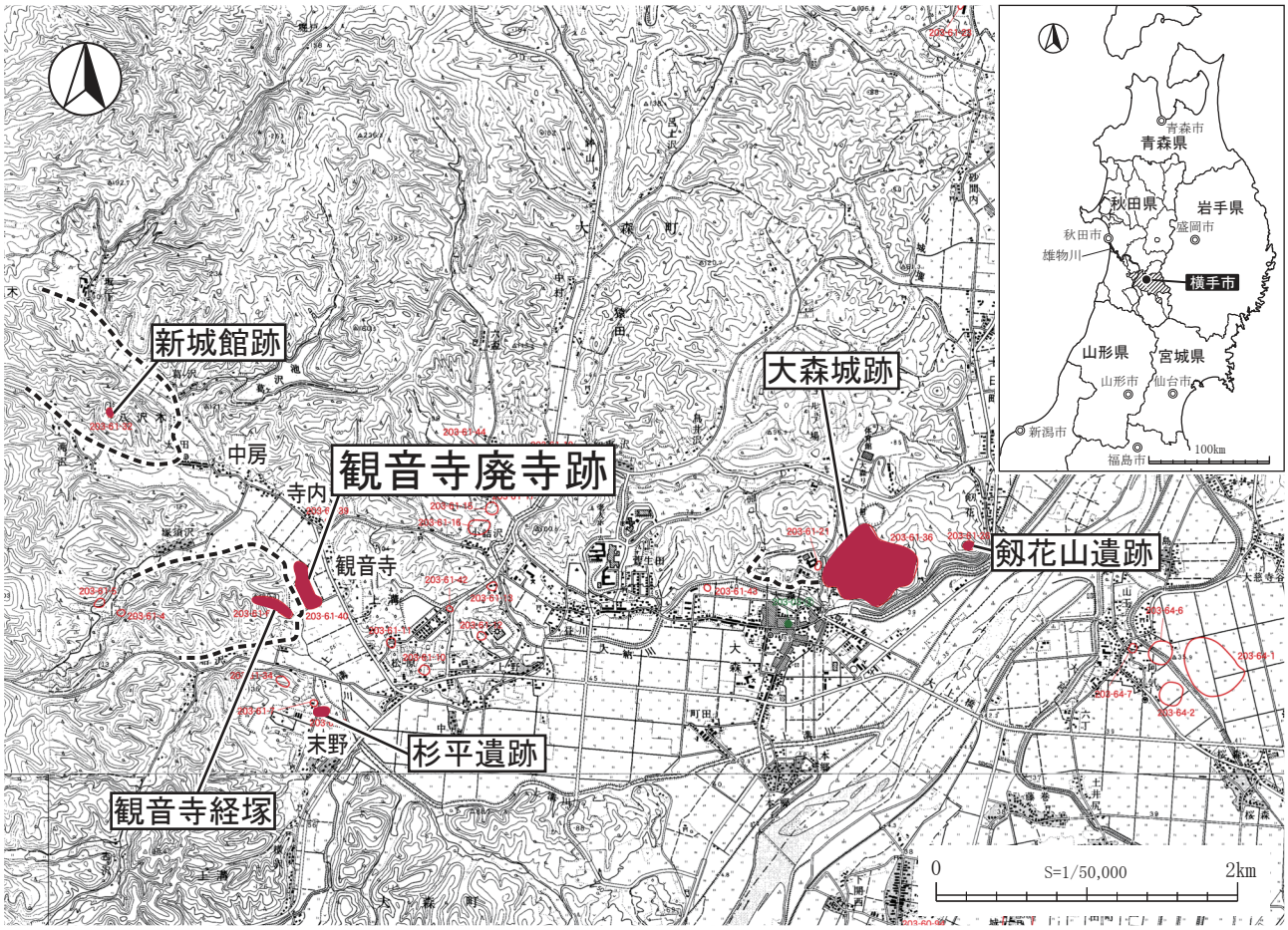
『観音寺廃寺跡』の報告書によれば、全体で 1,785 基（古代 877 基・中世 908 基）の柱穴が検出され、古代末期から中世前期の建物が 15 棟、中世後期の建物が 10 棟の 25 棟が提示されている（高島 2001）。古代の柱穴使用率は 142 基で全体の 16%であるため、遺跡の建物の全容を示しているとは言い難い。『観音寺廃寺跡』の報告書でも述べられているように現場での柱掘り方及び柱穴確認は難しい状況であったと思われる。弊職もこれまで横手市での発掘調査経験において、柱掘り方や柱穴は土壌のせいか非常に見つけにくく、ドローン写真を駆使して遺構確認の補填をしている状況である。

今回の建物復元は、中世後期と報告のある北端部の遺構群を除いた古代末期から中世初期とされるエリアで建物群の復元を行ったところ、柱穴 291 基を使用し、SB26 から SB57 の 31 棟を検出した（図 4）。復元されていた SB05・SB07・SB09・SB10・SB11 を含めると 36 棟となり、全体の柱使用率は 33%まで上昇したが、2/3 の柱穴は使用しておらず、本来の遺跡にある建物は復元できていないことになる。まだまだ精度を上げる必要があるが、今回は現時点の報告として論述するので、ご容赦願いたい。

４．各地区の様相

① 北西部【図 5】

掘立柱建物跡は 8 棟を新たに抽出した。建物主軸方向で分類すると 6 回の建て替えがあったことになる。建物は庇のない側柱がほとんどであるが、1 部屋を設けた造りのものが多い。周囲に井戸跡（SE）が複数あるので関連するものと考えられる。SB34 掘立柱建物跡は梁行 2 間（西から 2.7＋2.7＝5.4m）に桁行 2 間（南から 3.0＋2.4＝5.4m）で、東側に 1 間（1.8m）に 1 間（3.0m）の部屋が付く。



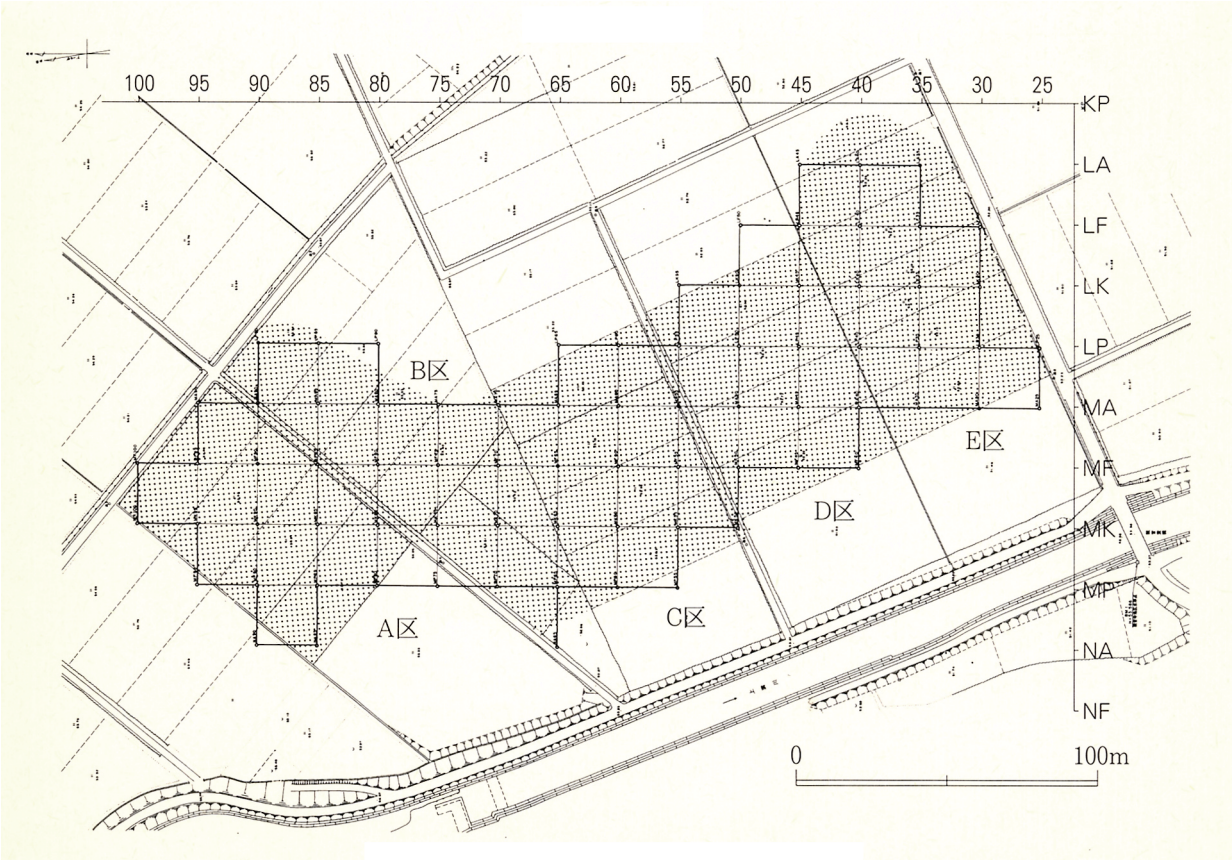


図１　遺跡位置図とグリッド設定図

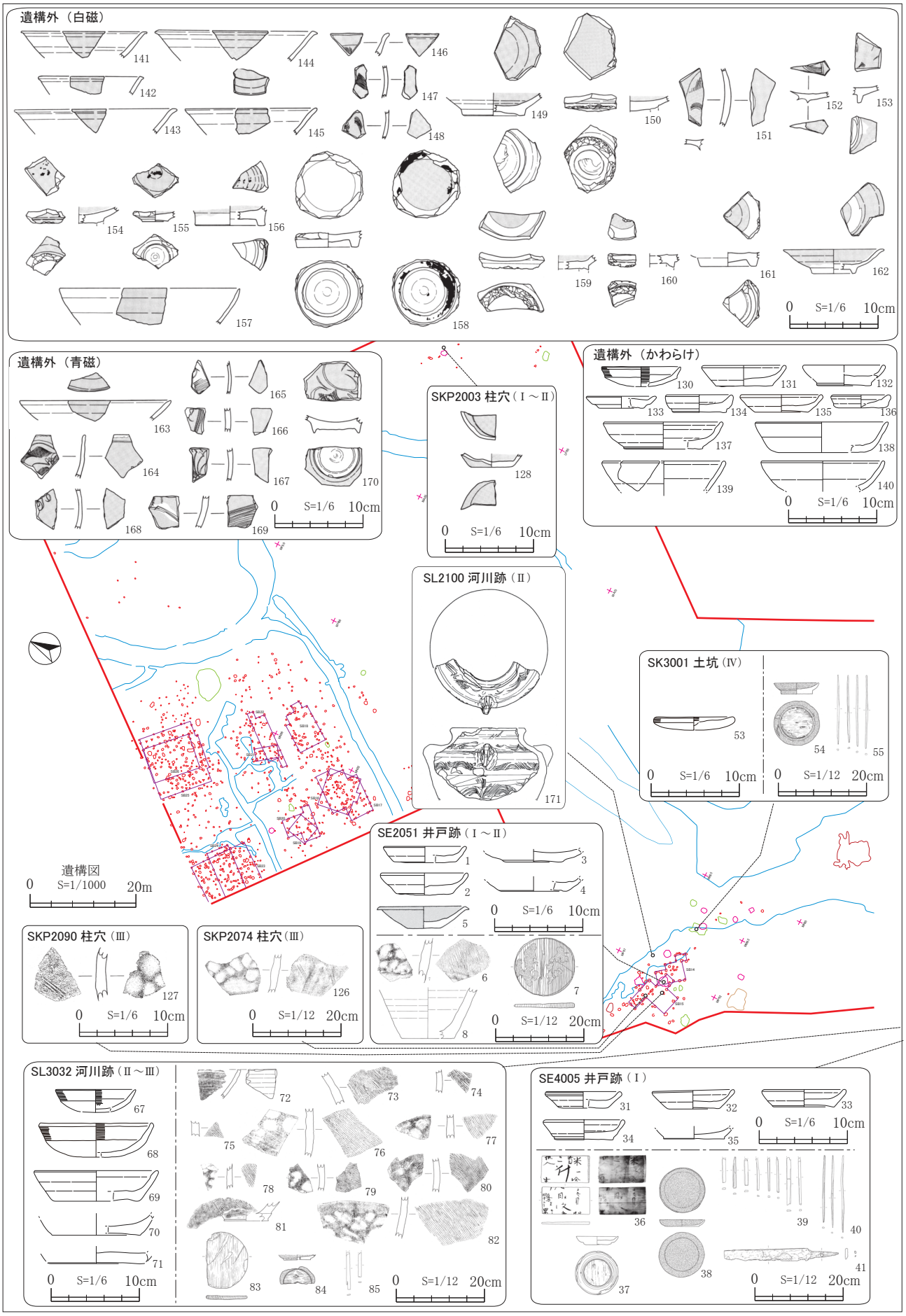

遺構外（白磁）
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
0 S=1/6 10cm
遺構外（青磁）
163
164
165
166
167
168
169
170
0 S=1/6 10cm
SKP2003 柱穴（Ⅰ～Ⅱ）
128
0 S=1/6 10cm
遺構外（かわらけ）
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
0 S=1/6 10cm
SL2100 河川跡（Ⅱ）
171
SK3001 土坑（Ⅳ）
53
54
55
0 S=1/6 10cm
0 S=1/12 20cm
遺構図
0 S=1/1000 20m
SE2051 井戸跡（Ⅰ～Ⅱ）
1
2
3
4
5
6
7
8
0 S=1/6 10cm
0 S=1/12 20cm
SKP2090 柱穴（Ⅲ）
127
0 S=1/6 10cm
SKP2074 柱穴（Ⅲ）
126
0 S=1/12 20cm
SL3032 河川跡（Ⅱ～Ⅲ）
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
0 S=1/6 10cm
0 S=1/12 20cm
SE4005 井戸跡（Ⅰ）
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0 S=1/6 10cm
0 S=1/12 20cm

図 2　遺構と遺物（1）

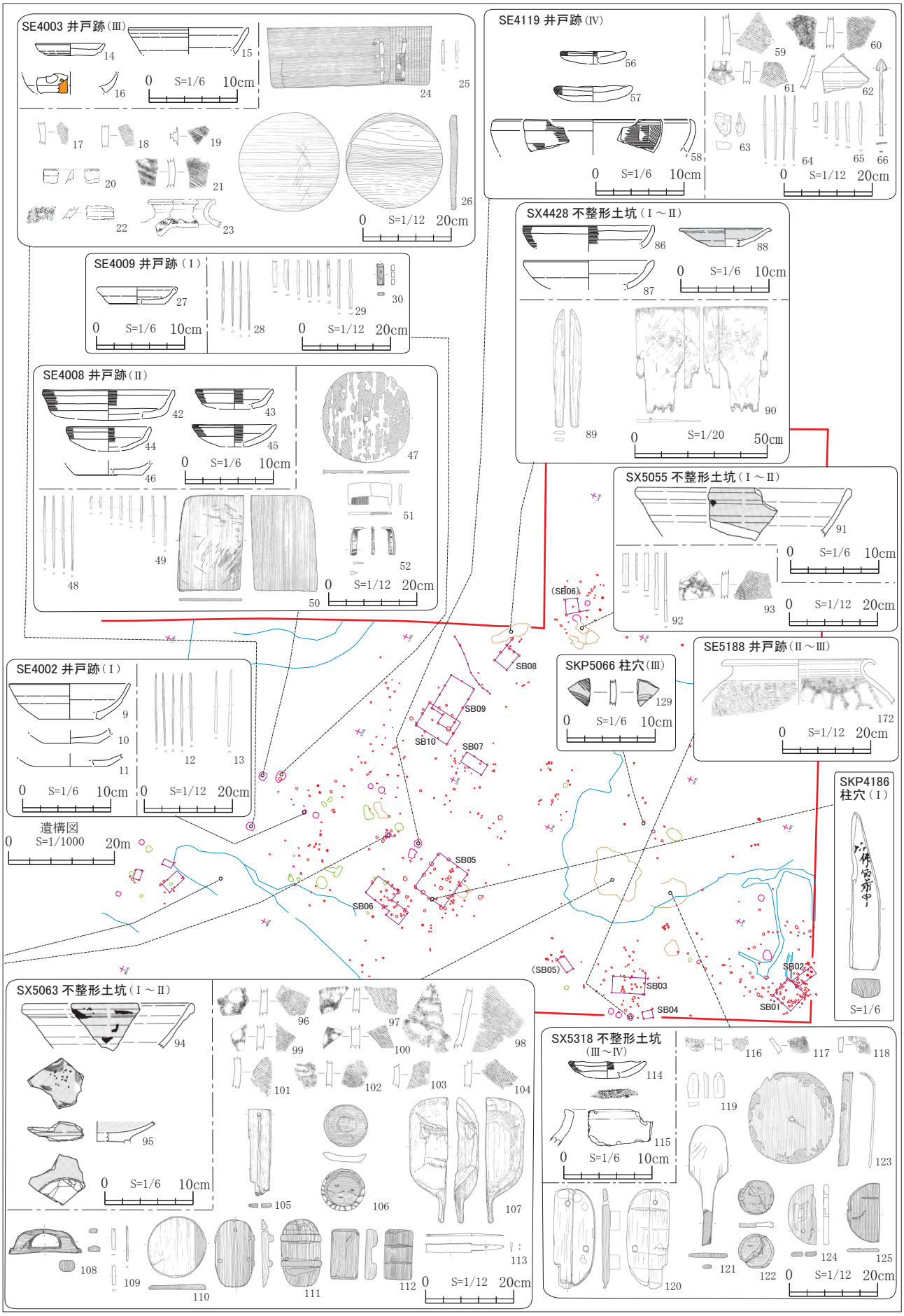

SE4003 井戸跡(Ⅲ)
SE4119 井戸跡(Ⅳ)
SX4428 不整形土坑(Ⅰ～Ⅱ)
SE4009 井戸跡(Ⅰ)
SE4008 井戸跡(Ⅱ)
SX5055 不整形土坑(Ⅰ～Ⅱ)
SE4002 井戸跡(Ⅰ)
SKP5066 柱穴(Ⅲ)
SE5188 井戸跡(Ⅱ～Ⅲ)
SKP4186 柱穴(Ⅰ)
遺構図
S=1/1000
20m
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SB08
SB09
SB10
(SB05)
(SB06)
SX5063 不整形土坑(Ⅰ～Ⅱ)
SX5318 不整形土坑
(Ⅲ～Ⅳ)
S=1/6
S=1/12
S=1/20

図 3　遺構と遺物(2)

② 中央部北側【図 6】

掘立柱建物跡はSB11の他、新たに5棟を抽出した。SB11のSK3038は便所の可能性が指摘されている。SB35は梁行4間（南から2.1＋2.1＋3.0＋2.1＝9.3m）に桁行4間（北から3.0＋2.7＋3.0＋2.4＝11.1m）の南北棟の二面庇建物跡で南西庇に部屋が付く。面積108㎡と大きい建物である。梁間が均等ではなく、桁行が4間など新しい要素がある。井戸跡は遺物からⅠ期からⅢ期と時間幅を持つ。

③ 中央部東側【図 7】

掘立柱建物跡はSB08.09.10の他、新たに2棟を抽出した。SB08とSB47は土坑を伴い、かつ同軸であり、同時存在した可能性が高い。SB47はSE5058井戸跡と重複している。SB08とSB09は側柱建物に部屋が付いている。SB10は梁行2間（西から2.4＋2.4＝4.8m）に桁行3間（南から2.1＋2.7＋2.1＝6.9m）の側柱建物であるが、部屋割され2部屋となっていることから新しい要素と思われる。

④ 中央部西側【図 8】

掘立柱建物跡はSB05.07の他、新たに7棟を抽出した。SB05は梁行3間（北から2.1＋2.1＋2.25＝6.45m）に桁行3間（西より2.7＋2.7＋2.4＝7.8m）で南側に庇が付く。面積は50㎡である。西側には同軸のSB49があり、梁行2間に桁行3間で北側に部屋が付く。これ以前の建物はSB42と考えられ、梁行2間（北から3.0×2＝6.0m）に桁行3間（西より2.7×3＝8.1m）で、柱間が均等で古い要素である。これも西側に1間の部屋が付く。正面にはSX4209不整形土坑がある。SB05より新しい建物としてSB26があり、行4間（北から2.1＋2.1＋3.0＋2.1＝9.3m）に桁行6間（西より2.4＋2.1＋2.1＋2.1＋2.7＋2.4＝13.8m）の南北棟建物で東西に庇が付き、北東に入口とみられる部屋がある。面積は128㎡と今回抽出した中では最も大きい。西側に位置するSB35とは類似性のある建物であるが、庇の柱間が不均等であるなど違いがある。

⑤ 南部東側【図 9】

掘立柱建物跡は新たに2棟のを抽出した。中央部には柱間2.4mで掘り方の大きい柱穴列を確認したが、この場所は表土を取り除くと地山ではなく旧河川堆積物層であるため、柱穴が検出しにくいと思われる。SB43や複数の柱穴が検出されていることから、このエリアにも建物があった可能性がある。

⑥ 南部西側【図 10】

掘立柱建物跡は8棟を新たに抽出した。2カ所で建物の重複する場所があり、いずれも4回の建て替えである。北のまとまりを見ると、井戸跡が3基まとまってあり、いずれかの建物と同時存在したと思われる。SB44やSB33は庇が付くというより下屋のようで、新しい要素である。SB44は梁行2間（西から2.7×2＝5.4m）に桁行3間（北から2.7＋2.7＋1.2＝6.6m）として造り、西側と南側に下屋を設けたと考えられる建物である。南側のまとまりには井戸跡がない。調査区南西端の低いところで柱穴が見えにくかった可能性もあり、SB45はさらに西側に梁行が延びる建物と想定される。最も大きな建物はSB52で梁行3間（西から2.1×2＋1.5＝5.7m）に桁行3間（北から1.5＋2.1×2＝5.7m）に東側に庇（下屋）が付く建物と想定したが、柱間から東側と南側に下屋が付く建物の可能性もある。

SL2100
（Ⅱ期）
SK3001
（Ⅳ期）
SE2051
（Ⅰ～Ⅱ期）
SKP2074
（Ⅲ期）
SKP2090
（Ⅲ期）
SB15（改）内柱穴
SL3032
（Ⅱ～Ⅲ期）
SE4002
（Ⅰ期）
SE4003
（Ⅲ期）
SE4008
（Ⅱ期）
SE4009
（Ⅰ期）
SK4005
（Ⅰ期）
SE4119
（Ⅳ期）
SX4248
（Ⅰ～Ⅱ期）
SX5063
（Ⅰ～Ⅱ期）
SKP5066
（Ⅲ期）
SX5055
（Ⅰ～Ⅱ期）
SE5118
（Ⅱ～Ⅲ期）
SX5318
（Ⅲ～Ⅳ期）
0
S=1/800
40m

図４　建物跡試案図

建物 S=1/400
SB40(新)
SB39(新)
SB34(新)
SB29(新)
SB28(新)
SB46(新)
SB15(改)
SB55(新)
SB39(新)
SB40(新)
SB28(新)
SB29(新)
SB34(新)
SB55(新)
SB15(改)
SB46(新)
SE2112
(Ⅱ期以降)
SE2123(Ⅱ期以降)
SE2051(Ⅰ～Ⅱ期)
SK2064
SK2065
SK2151
SK3001(Ⅳ期)
SL2100
SK3014
SE3015
SE3004
SK3019
SE3006
SE3003
SE3079
SX3083
MP67
MP62
MM62
MK65
MK60
0
S=1/200
10m

図 5 分割図（1）

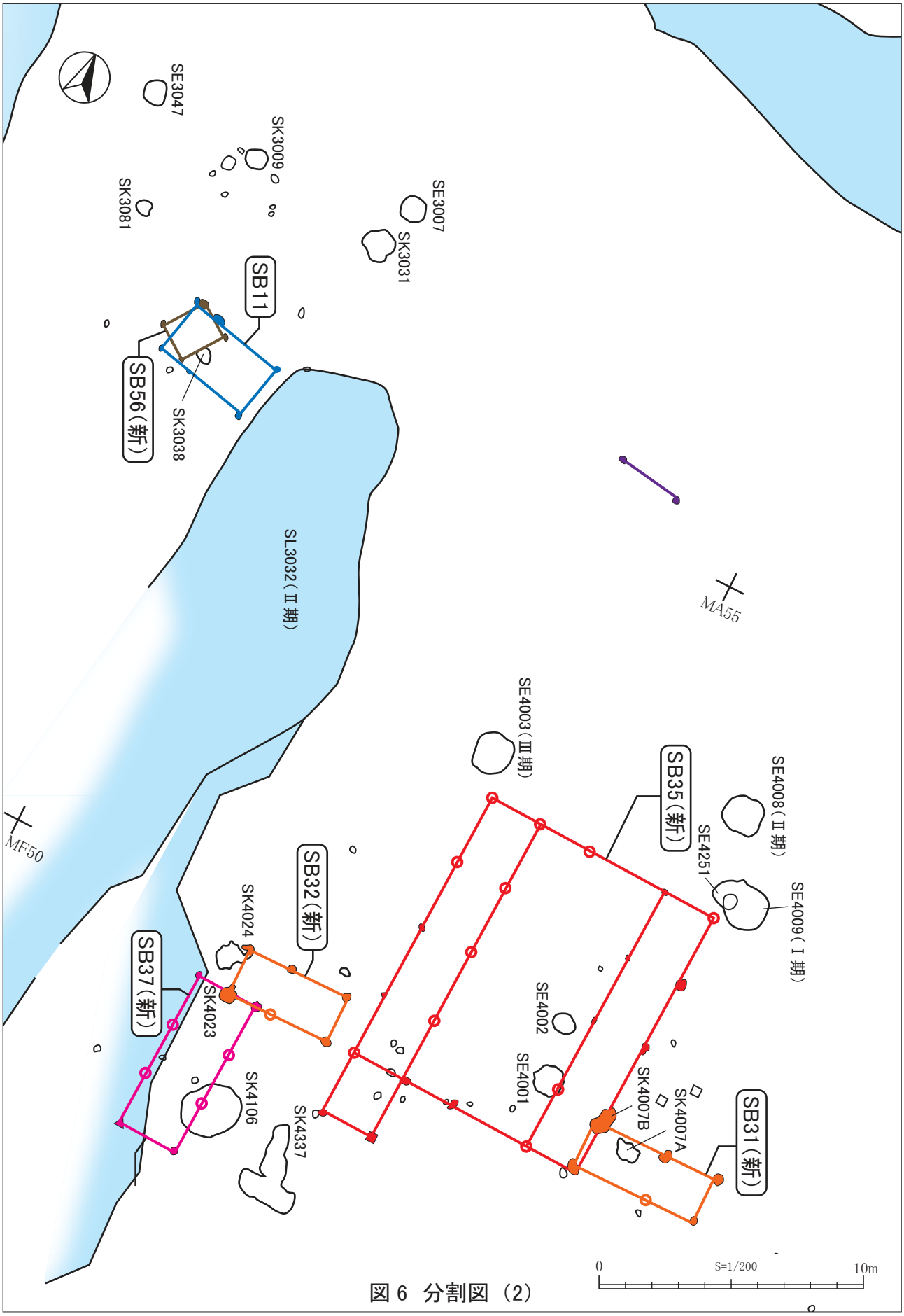

SE4009（Ⅰ期）
SE4008（Ⅱ期）
SB31（新）
SK4007A
SK4007B
SE4251
SB35（新）
SE4001
SE4002
SE4003（Ⅲ期）
SK4337
MA55
SK4106
SK4023
SK4024
SB32（新）
SB37（新）
SL3032（Ⅱ期）
MF50
SK3038
SB56（新）
SB11
SK3081
SK3009
SE3007
SK3031
SE3047
0
S=1/200
10m

図 6　分割図（2）

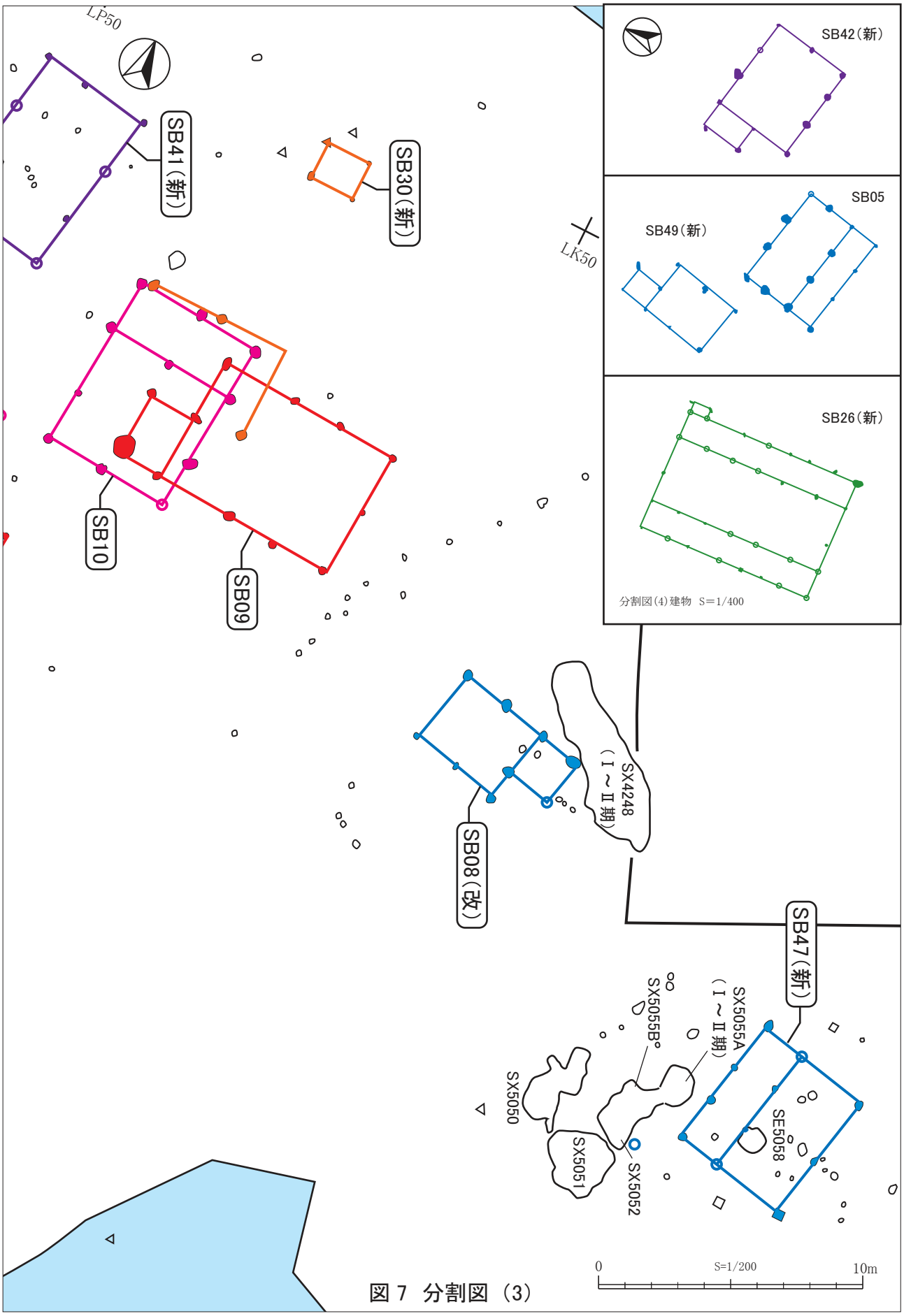

SB42（新）
SB05
SB49（新）
SB26（新）
分割図(4)建物　S=1/400
LK50
LP50
SB41（新）
SB30（新）
SB10
SB09
SB08（改）
SX4248
（Ⅰ～Ⅱ期）
SB47（新）
SX5055A
（Ⅰ～Ⅱ期）
SX5055B
SE5058
SX5052
SX5051
SX5050
0
S=1/200
10m

図７　分割図（3）

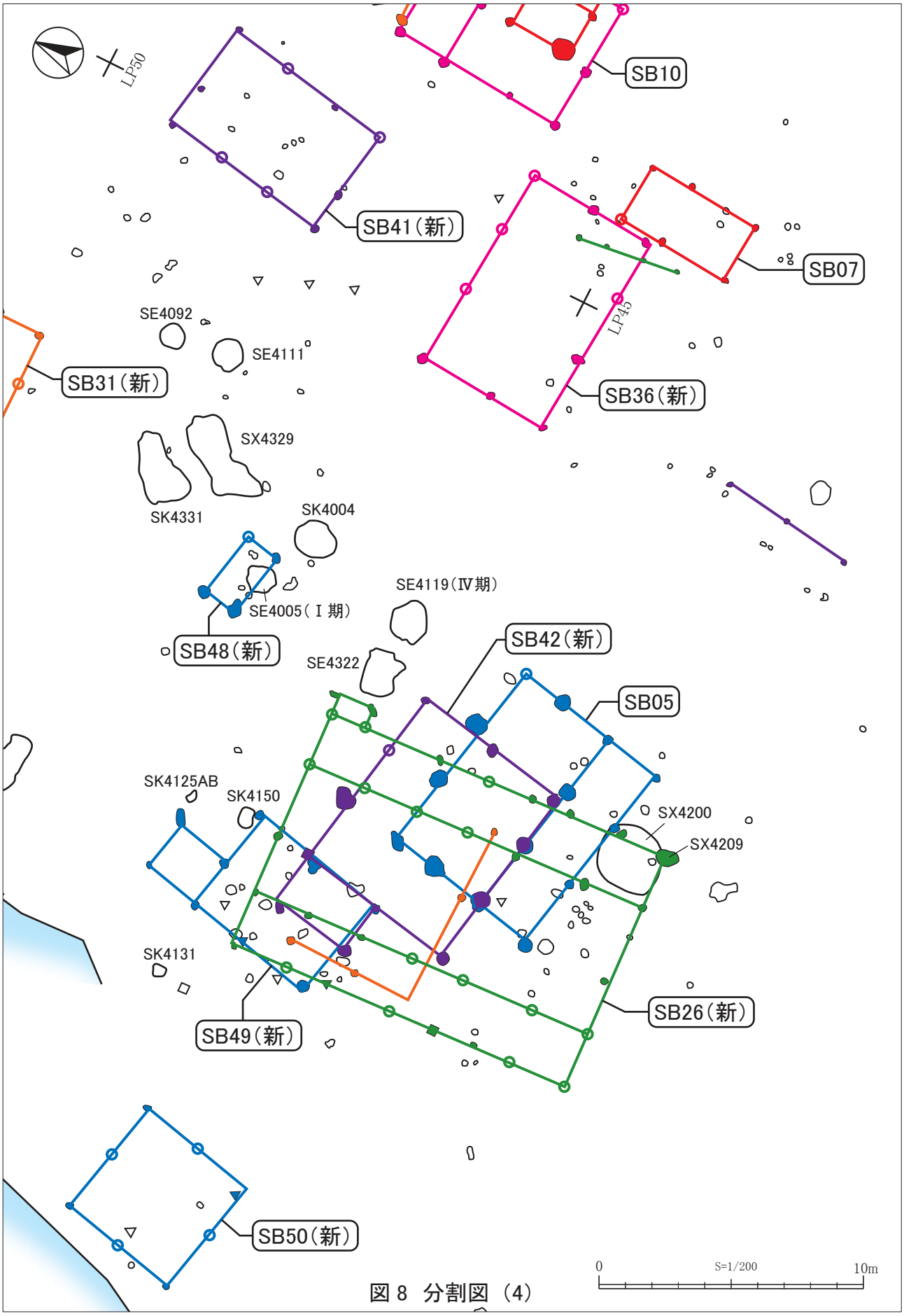

LP50
SB10
SB41（新）
SB07
LP45
SB36（新）
SE4092
SE4111
SB31（新）
SX4329
SK4331
SK4004
SE4005（Ⅰ期）
SB48（新）
SE4119（Ⅳ期）
SE4322
SB42（新）
SB05
SK4125AB
SK4150
SX4200
SX4209
SK4131
SB49（新）
SB26（新）
SB50（新）
0
S=1/200
10m

図 8　分割図（4）

SB52（新）
SB27（新）
SB45（新）
SB54（新）
分割図(6)建物 S＝1/400
SK5145
SB57（新）
LP40
SX5063
SKP5066（Ⅲ期）
SK5085
LK35
SB43（新）
LK30
0
S=1/200
10m

図 9 分割図（5）

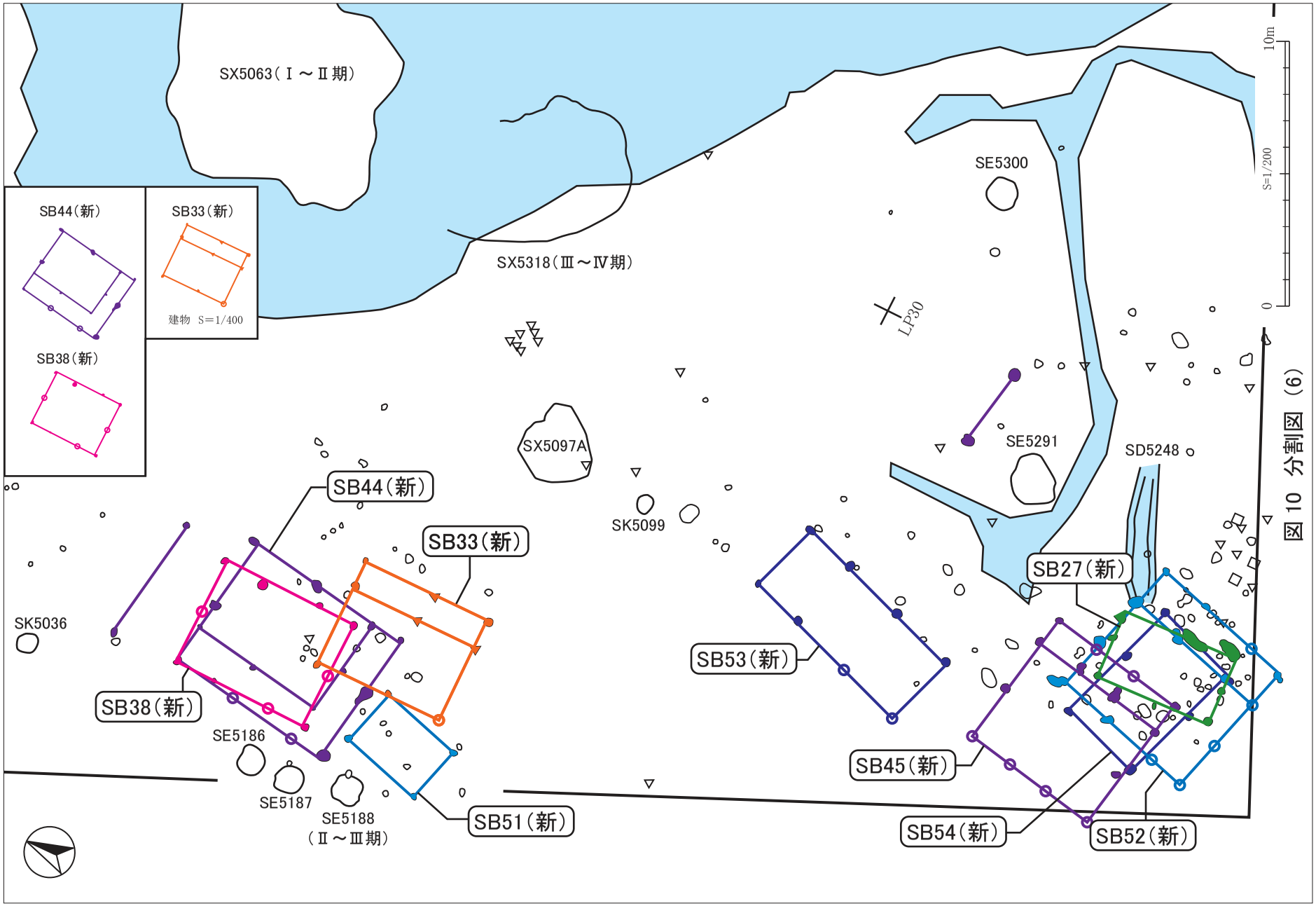

SX5063（Ⅰ～Ⅱ期）
SX5318（Ⅲ～Ⅳ期）
SB44（新）
SB33（新）
建物 S=1/400
SB38（新）
SE5300
LP30
SE5291
SD5248
SX5097A
SK5099
SB44（新）
SB33（新）
SB27（新）
SK5036
SB53（新）
SB38（新）
SE5186
SB45（新）
SE5187
SE5188
（Ⅱ～Ⅲ期）
SB51（新）
SB54（新）
SB52（新）
0
S=1/200
10m

図 10 分割図（6）

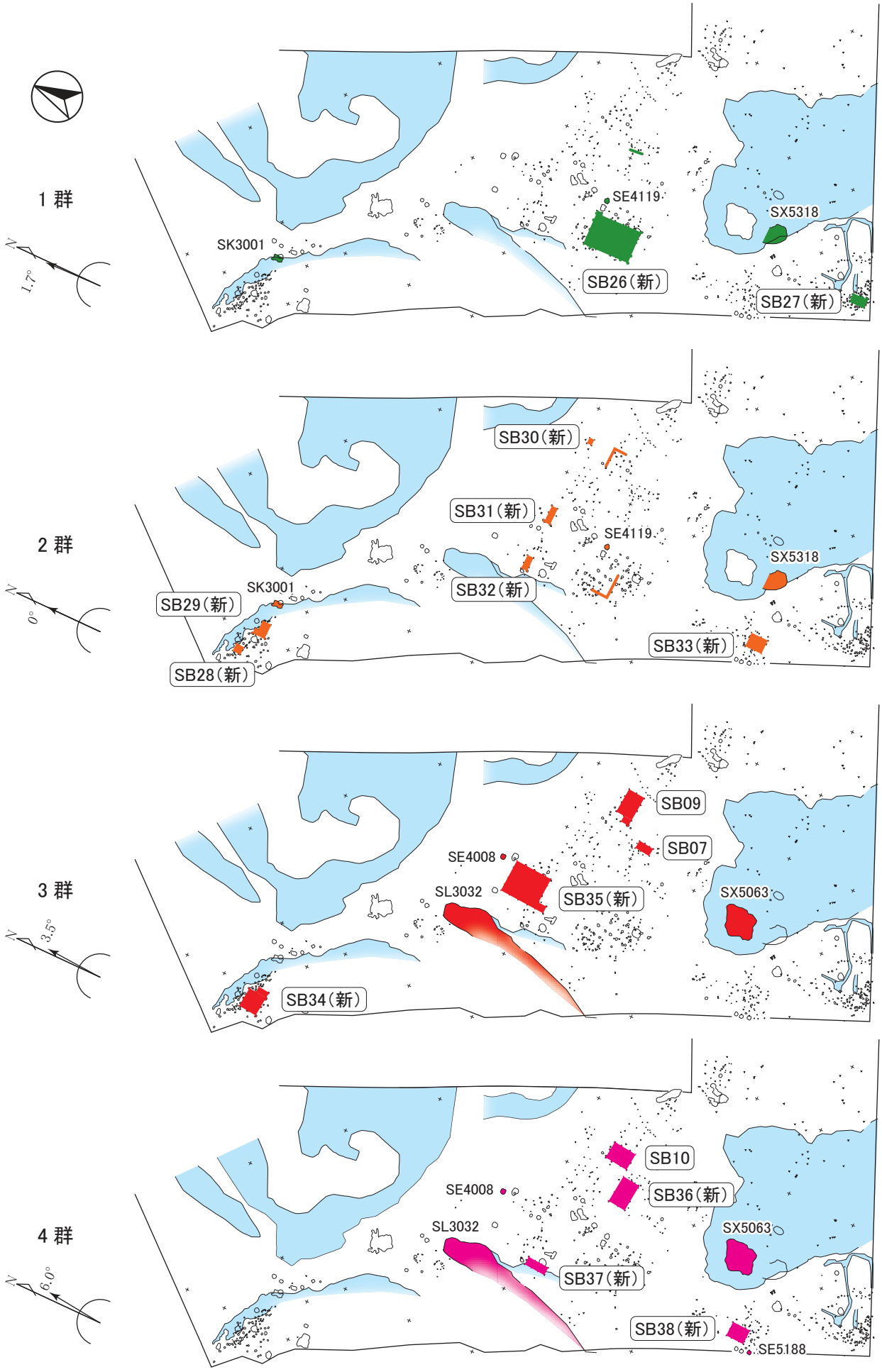

1 群
SK3001
SE4119
SX5318
SB26（新）
SB27（新）
1.7°
2 群
SB30（新）
SB31（新）
SE4119
SX5318
SK3001
SB29（新）
SB32（新）
SB33（新）
SB28（新）
0°
3 群
SB09
SB07
SE4008
SL3032
SB35（新）
SX5063
SB34（新）
3.5°
4 群
SB10
SE4008
SB36（新）
SL3032
SX5063
SB37（新）
SB38（新）
SE5188
6.0°
0
S=1/1,500
50m

図 11　建物群試案（1）

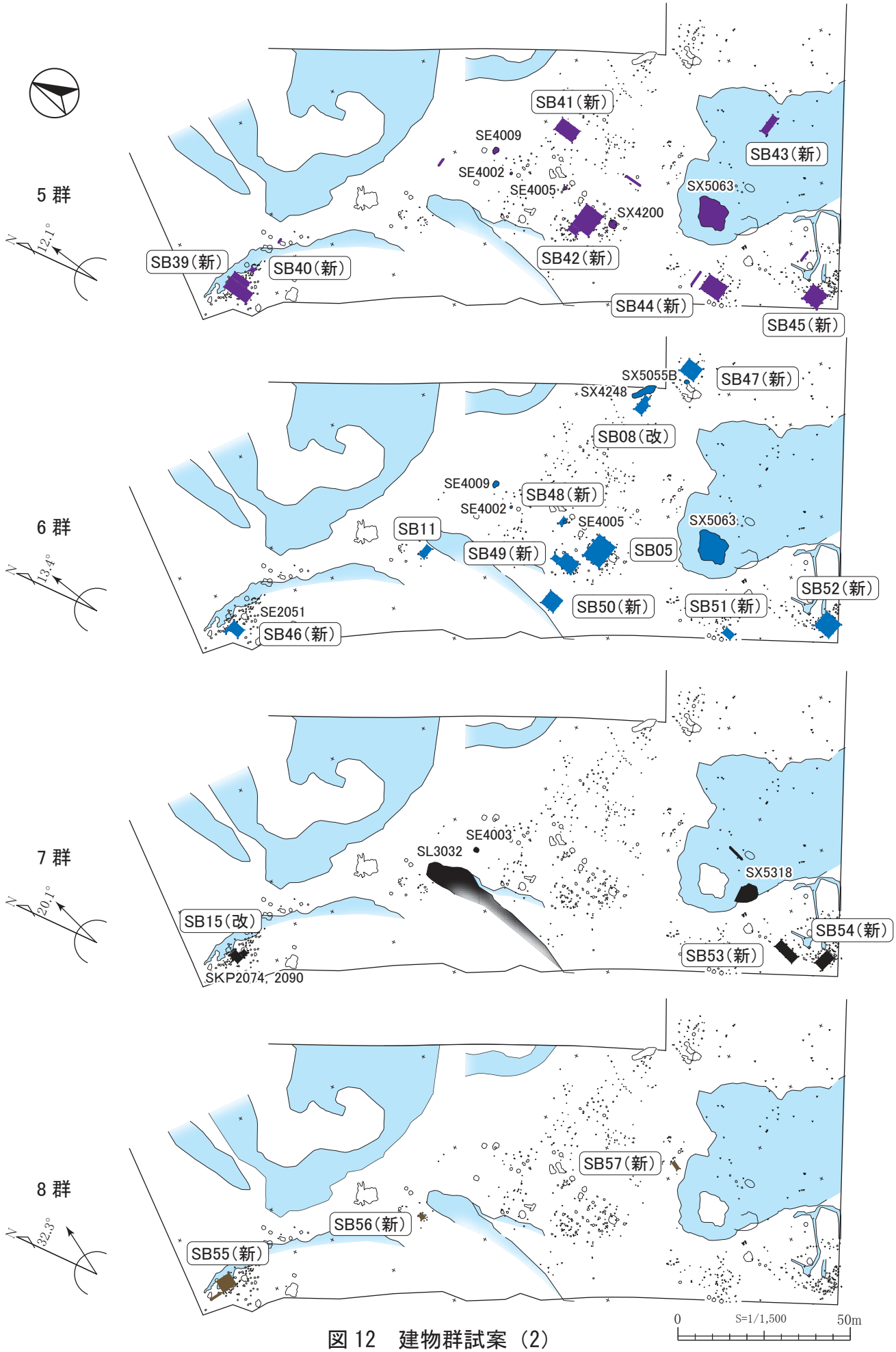

5 群
SB41（新）
SE4009
SE4002
SE4005
SX4200
SX5063
SB43（新）
SB39（新）
SB40（新）
SB42（新）
SB44（新）
SB45（新）
12.1°
6 群
SX5055B
SX4248
SB47（新）
SB08（改）
SE4009
SB48（新）
SE4002
SE4005
SX5063
SB11
SB49（新）
SB05
SB52（新）
SB50（新）
SB51（新）
SE2051
SB46（新）
13.4°
7 群
SE4003
SL3032
SX5318
SB15（改）
SB54（新）
SB53（新）
SKP2074, 2090
20.1°
8 群
SB57（新）
SB56（新）
SB55（新）
32.3°
0
S=1/1,500
50m

図 12　建物群試案（2）

５．建物群試案【図 11.12】

今回、提示した建物を軸別に分類したところ８群となった。この建物群で最も古いのは５群で、遺構の重複関係から６群が続くものと思われる。中心建物はSB42 からSB05 となる。時期は遺物から見るとⅠ期（12 世紀中葉）で、ロクロかわらけと白磁が主体の時期である。次に後続すると考えられるのが３群と４群である。４群では中心建物がないが、未検出からSB35 が継続して存続している可能性がある。２群から３群への遺構はSB35 中心建物が西側に移動するも、付属的な建物がほぼ同じ場所に立地している。SB35 の北東にあるSE4008 やSL3032（旧河川跡・窪地）の遺物が、ロクロかわらけの他に、手づくねかわらけを含むことからⅡ期（12 世紀後葉）と考えられるのである。次段階は７群で、北西部のSB15 の柱穴から須恵器系中世陶器が出土した。その特徴は、甕の叩き目が大仙市南外の桧山腰窯跡や大畑窯跡の特徴である三筋平行線文があった。また。SKP5066 から外面に櫛目文、内面に櫛状工具痕の施文がある同安窯系青磁碗が出土したことなどから、Ⅲ期（12 世紀末葉から 13 世紀初頭）とした。これ以降、白磁の出土が少なくなり、青磁の出土が多くなるのは平泉藤原氏と鎌倉源氏の嗜好の変化ともいわれる（飯村 2004）。中心建物は不明だが、SE4003 井戸跡から存在していた可能性が高い。最終段階が１群と２群であり、ほぼ真北をとるものである。SB26 とSE4119 の遺構立地やSB26 の柱穴の位置や柱間からこの段階とみられる。手づくねかわらけは厚く雑になっていることからⅣ期（13 世紀前葉）と想定している。Ⅱ期のSB35 とSB26 は桁行に違いがあるものの構造は類似している。Ⅲ・Ⅳ期の青磁の出土量も非常に多いことや大型の中心建物の存在から、この時期も遺跡としては充実していたと思われる。８群については今後の検討課題としたい。

６．まとめ

建物の立地を見ると、大型の中心建物がある遺跡の中心域が調査区中央部の微高地で、北西部と南西部に建物がまとまっている傾向である。建物と井戸がセットとなって変遷することが想定された。

建物群の軸方向は、西側の上溝川対岸にある古寺山を意識して建てられているようであり、その古寺山山頂には 20,000 ㎡を超える平坦地が存在することから（図１上）、この場所に出羽国観音寺が存在していた可能性も考えられる。

【引用・参考文献】

・秋田県教育委員会 1976『秋田県遺跡地図』・秋田県教育委員会 1987『秋田県遺跡地図（県南版）』・秋田県教育委員会 2001『観音寺廃寺跡』秋田県文化財調査報告書第 321 集・飯村均 2004「土器から見た中世の成立」『中世の系譜』高志書院・五十嵐一治 2001a「秋田県大森町観音寺廃寺跡の調査成果」『都市・平泉−成立とその構成−』日本考古学協会・五十嵐一治 2001b「観音寺廃寺跡」『掘立と竪穴』高志書院・大森町 1980『大森町郷土史』・島田祐悦 2014「出羽山北三郡の古代末から中世前期のかわらけ」『秋田考古学第 58 号』秋田考古学協会・島田祐悦 2017「秋田県」『平泉関係遺跡集成』日本学術振興会科学研究費・島田祐悦 2021「秋田県の平安鏡の分類とその特徴」『21 世紀の博物館学・考古学』雄山閣・高島成侑 2001「第６章　観音寺廃寺跡の掘立柱建物跡」『観音寺廃寺跡』秋田県文化財調査報告書第 321 集・八重樫忠郎 2002「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』高志書院・横手市教育委員会 2016『金沢柵推定地陣館遺跡−総括報告書−』横手市文化財調査報告第 38 集・横手市教育委員会 2016『金沢柵推定地陣館遺跡−総括報告書補遺編−』横手市文化財調査報告第 40 集・横手市教育委員会 2020『館尻遺跡』横手市文化財調査報告第 50 集